

「悪平等の弊」の意味

「教育の病弊」において「悪平等の弊」を挙げ、今、教育の理想であるかのように思われている「頭をそろえる教育」が、どんなに現実を無視した、誤った教育であるかを述べた。今回は、この「悪平等の弊」をもっと広く深く考えてみたいと思う。

今の学校教育では、どの学科もすべてよく出来る児童・生徒を育てることを目指して努力している。何でもよく出来る人間があっても悪いことはないがだれもがそうである必要など全くない。一個の人間として、何か一つだけよく出来るものを持っていたら、それで十分である。

数学の岡潔先生が絵が上手だとしても悪くはないが、下手だとしても、少しも悪いことはないであろう。むしろ、下手な方がずっと好感が持てると言ってよい。ところが、学校教育では、絵が下手だと、上手になるように努力せよ、と言う。音楽が悪いと、音楽の練習をうんとせよと言う。子どものあら探しをして、叱咤激励すればそれで良くなるものでも考えているのであろうか。

勿論、不得手な学科を努力してこれを得意にするのは悪いことだ、と言うのではない。ただ、得意なものは、「もう上手だから練習しなくて

もよい」と言われても、練習したくてたまらなく思い、従ってよく練習するものだが、不得手なものはなかなか練習したいという気持ちになれないのが人情である。それをあえて得意になるまで練習するということは、とても常人のよく出来ることではない。

そもそも、不得手なものを練習するということは、大変に苦痛を伴うものであり、苦痛だから練習を避け、練習を避けるから得意になれないのである。反対に、得意なものは、練習するのが楽しいからうんと練習し、うんと練習するからいよいよ得意になるのである。

だから、先生が音楽の不得手な生徒に、「君は音楽の才能がないようだ。練習するのが苦痛のようだから、これからはもう練習しなくてもよい。その代り、その分だけ得意な絵を描く練習をしなさい」と言ってやったらどうだろう。得意な絵が一段と飛躍するに違いない。

世の中には、いろいろな職業があって、いろいろな能力を必要としている。決して何でも出来る人間を必要としているのではない。一能のある人間を求めているのである。軍隊だって、万能の偉い大将ばかりでは戦争が出来ない。大将はただ一人あれば十分で、それよりも、一能しか持たない兵隊の方がたくさん必要なのである。